

ロシア正教会の作曲家としての P. I. チャイコフスキー

宮路 星史 (関西学院大学)

チャイコフスキーの宗教的合唱曲は 10 作品ある。本発表は、その中から特によく歌われる《聖金口イオアンの聖体礼儀》作品 41 (1878、以下《聖体礼儀》) と《徹夜禱》作品 52 (1882) を分析し、チャイコフスキーとロシア正教会音楽の関係性を考察するものである。

チャイコフスキー (Peter Ilyich Tchaikovsky, 1840-1893) は、西欧音楽史においては、西欧的な書法とロシアの民族性を止揚した、民族的な作曲家として評価されている (高橋ほか、1996)。一方で、同時代のロシア国内において民族的と評されることはほとんどなく、むしろその作風や同年代の「ロシア五人組」ら国民楽派の作曲家たちと距離をとっていたことから、「西欧化された作曲家」と評される傾向にある (森田、1993)。このような相対する評価の中、チャイコフスキーが民族的か否かに関しては研究が進められてきたが、彼がロシア正教会の音楽を作曲している事実については、これまであまり研究されてこなかった。

そこで本発表では、チャイコフスキーが作曲したロシア正教会の音楽に着目する。ロシアでは、988 年に正教会を受容してから 17 世紀ごろまで単旋律聖歌が歌われてきた。17 世紀以降になると、ロシアの伝統的な単旋律聖歌に由来する多旋律聖歌に加えて、西欧の合唱聖歌に由来する多旋律聖歌が登場する。そして 18 世紀ごろには西欧音楽の影響がより強まり、伝統的なスタイルの聖歌は作られなくなった。しかし 19 世紀になると、伝統聖歌に関心を持つロシア人作曲家が現れ、伝統聖歌の旋律に西欧音楽的な和声を付けるなどのアレンジが行われた。このように伝統聖歌への関心が高まる中、19 世紀末にチャイコフスキーは正教会の音楽を作曲したのである。

発表の中心は、《聖体礼儀》と《徹夜禱》の分析を通して、実際にロシア正教会で歌われている聖歌との共通点を指摘することであり、以下の 3 点である。一つ目は楽曲の形態である。両作品は現在のロシア正教会聖歌と同様に、混声四部の無伴奏合唱曲である。正教会では伝統的に儀式で楽器を用いることを禁止していること、及び 17 世紀以降に主流になった合唱形態をふまえて、チャイコフスキーはこの形態で本作品を作ったと考えられる。二つ目は、正教会の儀式における本作品の位置付けである。両作品は正教会の儀式に使われる曲集で、歌詞はロシア正教会聖歌と同様に、詩篇や教義の内容が教会スラヴ語で書かれている。三つ目は、楽曲の構造である。楽曲分析から、同時代の西欧音楽にはあまり見られない主和音から主和音への転調や、無拍子である伝統聖歌のリズ

ムを模した拍子を感じ取り難いパッセージ、伝統聖歌の旋律の引用が挙げられる。以上のロシア正教会聖歌と共通点をふまえ、チャイコフスキーが正教会の作曲家としての側面を有していることを明らかとする。